

ン伝説の基本構造が『アクセル』に摂取されるに際して被った、変形、融合の性質が明らかとなり、またそれがひとつの契機となって生じる、ヴィリエの諸作品中にあっての同作品の独自性の一端が解明されるはずである。

チュリアは単にハサンから伝説の被衣を借りた存在にすぎなかったのにたいし、同じハサンがヴィリエの想像力内での長い懐胎期間を経てジャンヌとアクセルに同化され、さらにいわば『アクセル』化された。こうしてヴィリエの作品において、ヒロインにたいし圧倒的な主導権を有する最初にして最後のヒーロー、「恋」と「黄金」と「生」との放棄を説いて至純の「愛=死」を共に完遂するアクセルが生まれたのであった。

(東京大学大学院博士課程学生)

オクターヴ・ミルボーとデカダンス  
——『ジュール神父』を中心に——

橋本克己

いままで自然主義文学の流れのなかで考察されてきたオクターヴ・ミルボーの作品に、19世紀末の20年間に風靡した精神風土としてのデカダンスという光を当ててみることで、新たな評価を与えようというのが発表の目的であった。とりあげたのは『ジュール神父』(1888年)である。この作品にはミルボーがキリスト教への信仰を喪失し、しだいに、矯激な女性嫌悪とむすびついたアナキズム的

人間観をもつにいたる過程が克明に描かれている。ミルボーの女性嫌悪とは、彼において「悪」の意識を形成している性欲の対象としての「女」が信仰を喪失した後も瀆聖的存在として強く意識されたもので、この作品においては、キリストのかわりに十字架に登った裸女として端的に表現されている。つまりミルボーによれば、キリスト教を信仰することができなくなった人間を支配しているのは、性の衝動と同時に喚起される殺人への欲求という生の盲目的な意志にすぎないということになる。このような人間観はやがて世紀末的な異様な美、腐敗したものグロテスクなもの美を高揚した『処刑の庭』の文明論的なデカダンス論にまで発達し、後期作品の思想的基調をなしてゆくわけであるが、発表ではジュール神父の過去の行状が描かれた第1部第3章を中心に、ミルボーにおける「悪」の意識をジュールによる村娘強姦の場面からキリスト教への信仰の喪失をパンフィル師との出会いのエピソードから考察することで『処刑の庭』以降展開される思想の萌芽を明らかにしようとした。

またここで問題にした第1部第3章は小説全体からみても、かなり奇妙な存在である。というのも1部・2部合わせて10章からなるこの小説の約半分の量をこの章だけで占めているし、また他章では田舎医者の子息である少年の1人称で語られているのに反し、ここでは3人称でジュールの内面に入りこみ、ジュールそのひとでなければ識りえない秘密を蜿蜒と暴いてゆくからだ。すなわちこの章があるために、小説は統一された視点を

失い、構成のバランスを崩してしまった。しかし逆にいえば、この章あればこそ、伝統的な価値の崩壊を前にして虚無と絶望に打ちひしがれ、高い知性をもちながら何の信念も理想ももてずに自分をもてあましていくジュールの姿を通して「魂の危機」が叫ばれた1880年代の若者たちの精神風土を表現できたのだらうし、デゼッサントの美学的な姿勢とは異なるデカダン精神の原点であるような苦悩とディレンマのなかに生きたジュール神父に深い陰翳をあたえることができたといえる。そのような意味でも、『ジュール神父』を中心とする初期3部作と『処刑の庭』以降の後期小説群は、デカダンス文学の視点から論及することでより広い展望をもちうるだろう。

(早稲田大学大学院後期課程学生)

### ランボーにおける ambivalence をめぐって

吉田 正 明

相反する感情の同時表明がランボー詩には多く見いだせる。しかも、アンビバレンスが詩作において重要なモチベーションとなっている場合すら見うけられる。「7歳の詩人たち」の子供の心に宿る夢想が、軽やかで輝かしい世界ばかりではなく、陰うつで重苦しい雰囲気にも満たされていることや、「酔いどれ舟」を飾る壮麗なヴィジョンを時おり横切る思わしげな溺死者の存在を我々は見過ご

すべきではないだろう。あるいは、『イリュミナシオン』中の「コント」で語られている至福のヴィジョンを形容する語の多くが否定辞をともなっているということも。『見者の手紙』でもそうであるが、ランボーにあっては、破綻の危惧を抱かせないような希望表明は数少ないのではなからうか。

こうしたアンビバレンスをバネにして生み出された作品が『地獄の一季節』に他ならない。語り手はアンビバレントな感情に引き裂かれており、肯定と否定、希望と失望、愛と憎悪といった対立する2極の間を絶え間なく揺れ動くのである。彼は超人を自負しつつも己の無能を嘆きもするし、芸術家の理想と百姓の現実を同時に自覚している。また、キリスト教の救済を渴望して止まない彼は異教徒ゆえ神を罵らざるをえないし、無垢を主張しながらも大罪を犯したといってはばからないのである。あるいは、見者の修業時代を回想しつつそれを弾劾する一方で、なおも見者としての矜持を抱きつづけている。この作品の持つ差し迫った緊迫感、語り手のこのようなアンビバレンスによって生み出されているといっても過言ではない。要するに、対立感情に引き裂かれた語り手の心理的葛藤が、『地獄の一季節』の想像(創造)的空間を決しているといえるのである。とすれば、この作品に表われるさまざまな2極対立(神と悪魔、天と地、善と悪、魂と肉体、真実と虚偽、救済と墮地獄、水と火、アニマとアニムス、やさしさと残忍さ、マゾシズムとサディズム、眠りと覚醒、仕事と怠惰、アウトサイダーと裁判官、黒